

抄 録

第56回鹿児島県公衆衛生学会口頭発表

県内の重症熱性血小板減少症候群（SFTS） の検査状況等について

濱田 結花¹ 御供田睦代 岩元 由佳
濱田まどか² 石谷 完二 岩切 忠文
福盛 順子

〔 第56回鹿児島県公衆衛生学会
平成26年 5月16日 〕

重症熱性血小板減少症候群（以下「SFTS」という。）は、発熱、消化器症状を特徴とするマダニ媒介性ウイルス感染症で、平成23年に中国において初めて原因となるSFTSウイルスが特定された。SFTSは、平成25年3月4日感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律において、四類感染症に指定され、平成26年2月4日現在、全国で報告された53名の患者のうち21名が死亡している。

本県においても、平成25年4月に1例目が報告され、現在まで当センターに16名の検査依頼があった。血液、咽頭ぬぐい液、尿の検体を検査し、血液の陽性率が高かった。臨床症状には陽性者及び陰性者の優位な差は見られなかった。今後は、患者情報の蓄積とマダニについてのウイルス保有状況等の調査研究を行っていく。

- 1 県立大島病院
- 2 保健福祉部健康増進課

しらす干しの過酸化水素試験法の検討

松岡さゆり 岩屋あまね¹ 吉村 浩三

〔 第56回鹿児島県公衆衛生学会
平成26年 5月16日 〕

2001年度からしらす干しの過酸化水素検査を実施しているが、添加回収試験における回収率が安定しない場合が見られる。そこで、抽出方法等について検討を行った。

また、最近10年間の過去の検出状況についても検討した。

その結果、回収率を改善するためには、操作中の過酸化水素の分解を防ぐ必要があり、「食品衛生検査指針」に氷冷と示されている操作以外にも、可能な限り氷冷し、試料の温度を低く保つことが重要であることが分かった。

また、天然由来と思われる過酸化水素の最大値については、過去の研究により、4.5ppmと言われているが（柴田ら、1997）、当センターにおける最近10年間の検査結果では4.5ppmを超えるものが372検体中37検体あり、全体の約1割であった。このことより天然由来の過酸化水素が4.5ppmを超えることも多くあると考えられる。

- 1 始良・伊佐地域振興局保健福祉環境部

第56回鹿児島県公衆衛生学会誌上发表

奄美地域におけるインフルエンザ夏季流行の要因に関する一考察

石谷 完二 岩元 由佳 濱田まどか¹
濱田 結花² 御供田睦代 岩切 忠文
福盛 順子

〔 第56回鹿児島県公衆衛生学会
平成26年 5月16日 〕

近年、奄美地域において、インフルエンザの夏季流行が観察されるようになった。そこで、インフルエンザ流行に与える影響因子のひとつとして気候変動との相関について検討を行った。

夏季のインフルエンザ流行の気象因子としては、梅雨時期を中心とした降雨量、日照時間の影響が大きく、典型的な冬季流行の気象因子としては、絶対湿度の影響が大きいことが分かった。

- 1 保健福祉部健康増進課
- 2 県立大島病院

第40回九州衛生環境技術協議会口頭発表

池田湖における水質の挙動について

鹿児島県におけるSFTS調査研究の現状について

宮元 誠 羽子田真吾 湯田 達也
中尾 兼治 須納瀬 正

御供田睦代 岩元 由佳 中堂園文字
穂積 和佳 石谷 完二 岩切 忠文

〔 第40回九州衛生環境技術協議会 〕
平成26年10月9日 那覇市

〔 第40回九州衛生環境技術協議会 〕
平成26年10月9日 那覇市

県内におけるSFTSウイルスの保有状況等の調査研究を平成26年度から実施している。国内の調査でSFTSウイルス遺伝子が検出されているマダニ種は、県内でも多く採集されるマダニ種であった。今回、タカサゴチマダニからSFTSウイルス遺伝子が検出された。まだ3か月の調査であるが、今後、約3年間の調査を予定している。県内の各地点別に、マダニの種類や成長ステージごとの季節の消長を確認できるものと考えている。

池田湖の透明度は1929年の調査で26.8mが観測されたが、その後の社会活動の活発化に伴い水質の汚濁が進み、1970年代には、透明度が6m前後まで低下した。

池田湖の透明度の変化について、これまでの水質常時監視の結果をもとに考察した結果、2月頃の透明度が14mを超えるなど、近年では回復傾向にあった。

しかしながら、2006年2月（4.5m）や2011年2月（6m）のように透明度が低下している年もあり、これは循環により底層から鉄及びマンガンイオンが供給され、両イオンが豊富な溶存酸素により赤褐色の水酸化物・酸化物のコロイドを形成し、浮遊していたためと考えられた。

養殖魚からのヒドロコルチゾン検出事例について

臼井 力

〔 第40回九州衛生環境技術協議会 〕
平成26年10月9日 那覇市

2013年度、養殖魚30検体のヒドロコルチゾン（以下「HC」という。）含有量を測定したところ、カンパチ及びマダイから一律基準値（0.01ppm）を超えてHCが検出された。HCは生体内物質であるため、生体内物質として通常含まれる量までの残留が認められているが、その値は明確にされていない。

保健所による養殖業者への聞き取り調査や投薬履歴確認の結果、HCの使用実態は確認されなかった。

今回の養殖魚からのHC検出事例は、養殖中の投薬ではなく、生体内物質としてHCが一律基準を超えて存在していることを示唆するものであった。

第21回リケッチア研究会口頭発表

薩南諸島におけるリケッチア症について

御供田睦代 岩元 由佳 中堂園文子
穂積 和佳 石谷 完二 岩切 忠文
福盛 順子

〔 第21回リケッチア研究会
平成26年12月20日 東京都 〕

薩南諸島におけるリケッチア症は、1990年3月の徳之島における日本紅斑熱患者発生記録が最初である。

その後、つつが虫病患者が、2001年12月に大隅諸島の屋久島で1名、2001～2004年にトカラ列島の口之島、中之島、諏訪之瀬島、悪石島で各1名発生している。日本紅斑熱患者は、奄美諸島の奄美大島で2006～2013年に7名、徳之島で1990～2011年に3名の発生がある。

調査では、捕獲した野鼠からツツガムシ及びマダニを捕集するとともに、ツツガムシは黒布見取り法及び土壌からのツルグレン法で、マダニは旗ずり法により採集し、病原体検索を行った。

2011年度の奄美大島調査では、患者発生地のヤマアラシチマダニから *Rickettsia japonica* を分離・検出した。

2012年の悪石島調査及び2013年の中之島調査ではつつが虫の主要媒介種であるタテツツガムシを初めて確認した。2013年の中之島調査では、捕獲したアカネズミ脾臓から *Orientia tsutsugamushi* (Kuroki型) を検出している。さらに、野鼠の血清抗体検査からもつつが虫病と日本紅斑熱の病原体の感染が示唆された。

MultiplexリアルタイムPCR検査法について

中堂園文子 御供田睦代 川森 文彦¹
大橋 典男²

〔 第21回リケッチア研究会
平成26年12月20日 東京都 〕

つつが虫病及び日本紅斑熱の早期診断として急性期血液及び刺し口痂皮のPCR検査は有用であるものの、つつが虫病と日本紅斑熱のそれぞれについてnestedPCRまで行うため、5～6時間程度の時間を要する。さらなる早期診断に向けて川森・大橋らが開発したつつが虫病リケッチアと紅斑熱群リケッチアを標的としたMultiplexリアルタイムPCRについて検討を行った。

平成25年度に当センターに依頼されたリケッチア症疑い65症例のPCR検体76検体について本リアルタイムPCRを行い、nestedPCRの結果との比較を行ったところ、nestedPCRでつつが虫病陽性となった8検体中8検体、日本紅斑熱陽性であった8検体中7検体が本リアルタイムPCRでも陽性となった。

鹿児島県ではつつが虫病と日本紅斑熱の発生時期が重複する期間があることから、早期診断に向けたスクリーニング検査として有用であることが考えられた。

- 1 静岡県環境衛生科学研究所
- 2 静岡県立大学

マイコトキシン学会第76回学術講演会口頭発表

黒糖のアフラトキシン汚染実態調査

岩屋あまね¹ 榎元 清美 吉村 浩三

（ マイコトキシン学会第76回学術講演会
平成27年 2月13日 千葉市 ）

本県に流通する食品のアフラトキシン（以下「AF」という。）含有量調査を実施したところ、複数の県内産黒糖からAFが検出されたことから、県内産黒糖についてAF汚染実態を把握するとともに、その汚染原因について検討を行った。

黒糖83検体について総AF含有量の測定を行ったところ、35検体から0.1ppb以上のAFが検出され、総AFの定量値は0.1～13.1ppb（平均：1.2ppb）であった。

黒糖のAF汚染原因を検討したところ、黒糖の製造工程ではAF含有量の増減はほとんど見られず、刈り置き期間（サトウキビを畑から刈り取り後、製造に供するまでの保管期間）とAF含有量にも関係が見られなかったことから、原料サトウキビの生育段階で既にAFに汚染されていることが推察された。

サトウキビのAF含有量は品種による差はなく、栽培農場により違いがあった。サトウキビの生育状況とAF含有量の関係について調査した結果、生育中に傾倒して土壌の汚染を受け黒ずみの多いサトウキビに個体差はあるもののAF含有量の高いものが多くみられ、黒ずみの少ないきれいなサトウキビについては低いものがほとんどであった。

以上の結果から、黒糖から高率にAFが検出されるのは、温暖な気候の中で栽培される原料サトウキビが生育段階で傾倒した場合、土壌中のAF産生菌による汚染を受けるためと推察された。

1 始良・伊佐地域振興局保健福祉環境部

